

清明せいめい
(杜牧とほく)

清明せいめいの
時節じせつ雨あめ紛々ふんぶん

路上ろじょうの
行人こうじん魂こんを
断たたんと
欲ほつす

借問しゃもんす
酒家しゅかは
何れいずの
処ところにか
有ある

牧童ぼくどう遙はるかに
指ゆびさす
杏花きょうかの
村むら

清明時節雨紛紛
路上行人欲斷魂
借問酒家何處有
牧童遙指杏花村

解説 清明の頃、野歩きをして雨にあい、春愁を詠ったもの。

語釈 ※清明Ⅱ春分から十五日目。今の四月五日頃にあたる。

※紛々Ⅱ雪や雨など細かいものが盛んに降るさまをいう。

※行人Ⅱ路を行く人。ここでは作者自身をさす。

※欲斷魂Ⅱ心が滅入る。※借問Ⅱちよつと尋ねる。

※酒家Ⅱ酒を売る店。※杏花村Ⅱあんずの花の咲く村。

通釈 清明のよき時節だというのに、雨がしきりに降りそそいでいる。その雨は道行く人の心を滅入らせる。その愁いを酒でまぎらわせようと、牛飼いの少年に酒家のありかを尋ねると、遙か彼方にあんずの花の咲く村を指さしてくれた。